

北海道特集

「北海道、こんなに広いのに行く場所がない...。」そのような時におすすめなのは歴史を辿ることである。北海道の歴史には「開拓」という熱い物語があるではないか。特に、かつて日本の産業を支えた炭鉱は北海道の近代化の歴史を語る上で欠かせない。ということで、今回は「赤平市炭鉱遺産ガイドランス施設」を訪れた。



錆びたトタンが独特な
雰囲気を出す。

施設では実際に炭鉱で働いていた方のガイドを聞きながら旧炭鉱の建物内を見学することができる。実際に利用されていた炭鉱を見学できるのは旧赤平炭鉱のみである。炭鉱内部は当時のまま保存されており、右手にはレールとトロッコが、正面には非常に大きな立坑（たてこう）が聳え立つ。立坑とは垂直に掘削された坑道である。赤平炭鉱の場合、深部にいくにつれて断層・褶曲した箇所を避けることが可能となり、比較的直線的に存在する炭層に辿り着くという。その深さはなんと650m。立坑とそのやぐらは主に鉱員と採掘した石炭を送るのに用いられた。中でも定員72名であるエレベーターは550mを1分足らずで移動するなど当時の技術を結集させていたため、「東洋一」を謳った。

このような立坑が魅力の赤平炭鉱であるが、私はガイドさん本人にも魅了された。ガイドさんは「救護隊」という炭鉱内での事故等が起こった際に救護活動を行う部隊を兼務していた。「私が勤めていたときはね...だったよ。」「...だったから大変で...。」と、ガイドさんが懐かしげに語る当時の事情や情景は「炭鉱の歴史」では決して語られることのない「炭鉱夫」の歴史であった。

「赤平市炭鉱遺産ガイドランス施設」は素晴らしい。しかし、実際に従事していた人が目の前にいるのに、当の炭鉱はもう稼働していないという事実は、日本産業の基盤であったはずの炭鉱の歴史を非常に儚いものに思わせた。赤平炭鉱はまるで並行世界にあるかのような炭鉱の歴史を感じることでできる唯一の空間であるだろう。（ ）

目の前にはトロッコと立坑やぐらがそびえ立つ。
窓から差し込む光が非常にノスタルジック。



作家紹介

思想を盗め！

新時代のホラーミステリ 今村昌弘

ゾクッとするようなミステリが読みたくないですか？ ミステリと言っても沢山の種類があるので、どれを読むかとても悩みますよね。今回は、私が一番注目しているミステリー作家の今村昌弘について紹介しようと思います。

彼は二〇一七年「屍人荘の殺人」で、鮎川哲也賞を受賞しデビューしました。この受賞作について、推理作家の北村薫も「この頭のはたらきには、素直に脱帽するしかない。」と絶賛しています。

「屍人荘の殺人」はシリーズになっており、他に「魔眼の匣の殺人」「兇人邸の殺人」があります。簡単に言えば、彼の代表作「屍人荘の殺人」シリーズは非現実的なミステリです。本格推理にゾンビホラーが混ざっていて、なんとも面白い！彼の作品は描写にとっても長けていると思います。ゾンビは、想像するだけで鳥肌がたつほど恐ろしく、また建物も目の前に見えてくるほどリアルです。

彼の本には特徴があって、初めのページに大きくて複雑な見取り図があります。本文とその見取り図を行き来してトリックを考えることはとても楽しくて、彼の本の魅力の一つです！展開も、ほかのミステリー小説にはない「そんなのあり？」というもののばかりで、最後まで緊張しながら読めるような、そんな小説を沢山書いています。

あなたも今村昌弘のミステリを読んでハラハラドキドキしてみませんか？（ ）

月高図書館総決算

外は一面の銀世界になり、年内の登校日も残りわずかとなりました。そこで、2023年に月高図書館でよく読まれた(貸出された)本を一挙に紹介し、図書館の1年の締めくくりとしたいと思います。

1

六人の嘘つきな大学生 浅倉秋成 KADOKAWA

2022年、本屋大賞候補にまでなった本書。序盤、中盤のドロドロとした展開からの爽やかなラストへの着地が魅力の作品です。



1

汝、星のごとく 凧良ゆう 講談社

2023年、本屋大賞を受賞した本作。瀬戸内海を舞台に、惹かれ合いながらも成長していく少年少女を描いたいわゆる恋愛小説です。

1

チ。一地球の運動について一 魚豊 小学館

「マンガ大賞2021」第2位ノミネート作。舞台は中世、15世紀のヨーロッパ。当時禁忌とされていた地動説を追い求めようとする人々の物語です。

4

おいしいごはんが食べられますように 高瀬隼子 講談社

4

腹を割ったら血が出るだけさ 住野よる 双葉社

興味を持った作品があったら、是非図書館に読みに来て下さい！（ ）

心に移りゆく
よしなしごと

このコーナーでは、局員が自身の体験や見聞を通して思ったこと、考えたことを、「そこはかとなく」書いた「エッセイ」を紹介していきます。

「なんとも言えない感情」と考えたときに、出てくるのは物悲しい雰囲気、侘び寂びというような景色かなと思うのですが、それに豪華だとか、とにかく沢山あるものは含まれにくいと感ぜます。

学校の授業で触れる俳句や短歌なども、多けりゃいいってモンじゃねえよ、と言っているようで。確かに、朝乾いてキンとした空気の湖水のほとりで、波に流され辿り着いた貝殻が、ごそと千個くらいあっても風情は感じませんし、その上をグァグァ鳴きながらカモメが大群で飛び回っているのはむしろ嫌。何かが欠けていたり、あるいは朽ちていたり、そんな景趣がむしろ美しい。

しかし、自分は思うのです。侘しければいいってモンじゃねえよ、と。そんな儚さの塊のようなものを摂取し続ければ、喪失感で胸焼けしそうです。たまに感じるからこそその良さでしょう。なんとも言えない感情になるためのものが、さみしさとか儚さとかではなくてもいいと思うのです。

例えば、東屋の下にあなたがいて、その周りを無数の東屋が囲っていて果てが見えないような空間。帰り道、路の両脇に、隙間なく立っている街灯。シュールというか、エモというか。侘び寂びとはまた別の「なんとも言えない感情」になりませんか？この間流行っていたLiminal SpaceやThe Backroomsとかもエモな気がします。よく分かりませんが。

これまでの話を踏まえて、多くの人が頭を悩ませている侘び寂び摂取過多問題については、適度にエモのコンテンツで中和することを解決法とさせていただきます。（ ）

月高この1枚！



冬が来たただほー。
ストーブが恋しいだほー。

場所：音楽室 撮影：

片言隻語

空気が冷え白い息が出るようになったこの頃、皆さんはどうお過ごしでしょうか。私は寒さで朝なかなか起きられず、いつも倦怠感を感じながら登校しています。もう完全に冬ですね。この季節といえばクリスマス。このとき飾るクリスマスツリーの意味を皆さんご存知でしょうか。実はクリスマスツリーには「永遠の象徴」という意味があります。キリストの教えが永遠になることを祈ってツリーを飾り、そこで恋人たちが永遠の愛を誓ったそうです。皆さんは今年のクリスマス、誰と一緒に過ごしますか？私はいつも通り一人です。チクショウ！（ ）